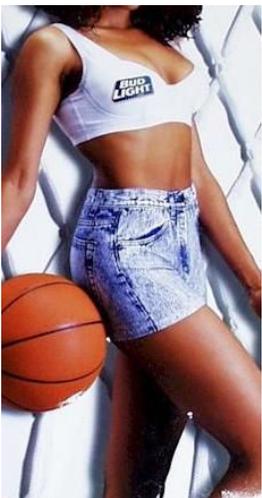


私の名はエイミー・キム 2

——怪我をするのはあいつら



エイミー・キムこと金恵美が、廃工場で三人の男を瞬く間に去勢してしまったことは、とくに事件にもならなかったにもかかわらず、いつしか噂となって学校じゅうに広まったらしい。教師や生徒たちは、前にもまして恵美を恐れるようになった。

一人だけ、命知らずがいた。ある朝、ぼくは恵美に命令を受けた。最近、別の学校で暴力事件を起こして転校してきた三年生の男子を、思い切り嘲笑して殴られて来い、という。

ぼくは最初は嫌がった。恵美から振るわれる暴力は、いくらでも喜んで受け入れられた。しかし、他の人間、とくに男からの暴力は、ただ苦痛なだけだ。

もじもじして返事しないぼくの頬を、恵美はいきなり平手打ちし、それからいきなり股間をつかんだ。休み時間、他の生徒が見てるなかでだ。

「知ってるよ」

恵美は、親指でぼくのペニスをまさぐり、他の指で睾丸を締め付けながら耳元でささやいた。

「私じやなきや、いやなんでしょ」

そういうあんた、好き。恵美の息がぼくの耳元の敏感な部分をくすぐる。言われるまでもなく、ペニスは勃起していた。恵美の唇が顔のすぐそばにあり、親指で優しく愛撫される快感と、睾丸を締め付けられる苦痛。

周りの生徒たちは、ぼくから距離を置き、視線を逸らしている。

「だからね、そいつにボコられてる間……目をつぶって、私のこと想像して、私にボコられてると思ってみ」

それで勃起するかどうか、実験だよ。

ぼくはいよいよ三年生の校舎に行く。もともと出来の悪い生徒が、最悪な環境で三年間を過ごすというなるかという見本みたいな連中の巢窟だ。

足を踏み入れると、廊下でたむろしていた三年たちが、険悪な視線を一斉に向けてきた。だが、一人が、あつと叫び、それからこそそと仲間に耳打ちした。耳打ちの波はあつという間に広がり、全員、ぼくから目をそむけた。

どうやら、恵美の悪名は、三年の間にもどろいているらしい。

「なに、あいつが、恵美って奴の彼氏かよ」

一人が、聞こえよがしに怒鳴った。例の転校生だ。細身だが、凶暴そうな面つきだ。両手をポケットに突っ込み、顎をあげて歩み寄ってきた。

「てめえか、女に玉蹴られて喜んでる変態は」

顔を寄せられて威圧された。膝が震えた。前の学校で教師に暴力を振るって病院送りにしたという噂もある。気に入らない他学校の生徒の右目を潰したとも聞いた。白眼がちのぞつとするよ

うな表情は、噂が必ずしも大袈裟ではないように思えた。

「何しに来たんだよ、え？」

返事をしないでいると、いきなり胸倉をつかまれた。殴られる……。

ぼくは律儀に目を閉じ、必死に恵美を思い出そうとした。だが、恐怖でそれどころではなかった。額に重い衝撃を受けた。くらくらし膝が落ちた。頭突きを食らったらしい。ぼくは必死で恵美の顔を脳裏に描こうとしたが無駄だった。もちろん、勃起なんかしやしない。

「てめえの彼女のチャンコロにいつけ！　いつか、俺が二度と人前に出れないような面にしてやるってな！」

鳩尾（みぞおち）にパンチを食らった。吐き気がした。もう恵美を想像している余裕なんかなかった。眼を開けると、転校生は、どう料理してやるうか、と獐猛な面つきでしきりに唇を舐めている。涙が出そうになった。

そのとき。

不意に転校生の顔がゆがんだ。眼を見開き、吐きそうな表情で、床にくず折れた。両手が股間に当てられている。

その背後に、恵美が涼しい顔で立っていた。言うまでもなく、恵美は後ろから転校生の股間を蹴り上げたらしい。

恵美の顔に、ほつとすると同時に、むくむくとペニスが膨らみ始めた。しばらくしゃがみこん

で苦痛をこらえていた転校生は、やがて横倒しに倒れ、細かく痙攣しながら涙をこぼしはじめた。

「チャンコロじゃないからね、私は」

恵美は転校生の顔に。べつと唾をはきかけ、いこ、とぼくを促した。

ぼくは、よろよろと立ち上がった。額と鳩尾に受けた衝撃が残っていた。

「顔、血だらけだよ」

恵美に言われ、額に触れると、指先が真っ赤になった。髪の毛の生え際が、頭突きで切れたらしい。恵美はにやにやしながら、傷口を指で弾いた。

「いた！」

額に両手を当てて後ずさったぼくに、恵美は手を叩いて笑い、手当てしてあげる、とぼくの腕をつかんで歩き出した。

- 5 -

行き先は、女子トイレだった。恵美が入ってくると、タバコをふかしながら談笑していた三年の女子生徒が一斉に逃げ出した。

二人きりになったトイレで、恵美はハンカチを水でひたしてぼくの顔の血を拭いながら、いきなり股間に膝蹴りを浴びせた。激痛にしゃがみこんだぼくの髪の毛をつかみ、あおむけに床に倒した。

「ね……」

額の傷にキスしながら、恵美はぼくの股間をまさぐる。

「あいつにボコられて……勃起した？」

首を横に振ると、嬉しそうにぼくの髪を引っ張って頭を起こし、それから床にたたきつけた。後頭部を思い切りコンクリートの床に打ち付けられ、ぼくは失神した。

ようやく眼を覚ますと、ぼくは女子トイレの床に伸びていた。ズキズキする頭を押さえながらようやく起き上がると、ズボンがずりおろされ、股間がむき出しになっていた。ペニスは勃起したままだった。

こんなかつこうで、女子トイレに放置されていたのだ。

思うように動かない両手で、なんとかズボンをはきなおし、やつと立ち上がった。朦朧とした頭をクリアにすべく振りながら、壁伝いにドアまでたどり着くと、

「ちよつと」

声のほうを見ると、壁に背をもたせかけた女子生徒が、こちらを見ていた。

「恵美に言ってくれない？ どうでもいいけど、一年なんだから、上級生のトイレを使うなよつて。あいつ、二年の男子ボコるときは、二年のトイレまで押しかけて、おれら、いい迷惑なんだよつて」

彼女は二年生だろうか。一歳上とはいえ、恵美に対して、恐れを抱いているふうは微塵もない。

- 6 -

堂々としている。細身で引き締まった体型。卵形の小さな頭。太くて長い眉にひとえまぶたの大きな眼。黒髪をショートカットにして、ボーイッシュだが、なかなか魅力的な顔立ちだ。うちの学校にはまずいない、ちよつと体育会系の風貌。

「すいません」

頭を下げると、いきなり蹴りが飛んできた。右の太ももをしたたかに蹴られ、ぼくは悲鳴をあげて床に両手を突いた。

うわ。

やっぱ、凶暴なタイプ……。でも……恵美の蹴りほどの威力はない。

「立てよ。邪魔だつて言ってるだろ」

言われて立ち上がると、彼女はかなりの長身だった。175センチはあるだろうか。ぼくより十数センチ高い。

「あんたが、恵美の彼氏なんだ」

つくづく見詰められてそう言われ、ぼくは困惑した。

彼氏？ 彼氏かな……。「好きだよ」とは言われてるし。

でも、今のぼくは……ふつうは、こんなふうに呼ばれるんじゃないかな。

「それとも、奴隷くん？」

そうそう……。つて、なんで知ってるんだ？

ぼくは改めて彼女を見た。腕組みし、顎をややあげて、硬い表情でぼくを見ている。

「そうかも……」

口ごもつて答えると、彼女は大きな口を開けて笑った。笑い声が狭いトイレじゅうに反響した。

「あんたつて、結構おもしろいじゃん。恵美が気に入るのも分かるよ」

痛いくらい強く肩を叩かれた。

「恵美に伝えてよ。昼休み、体育館で待ってるからつて」

「体育館……」

「タイムマンはるんだよ」

「え……」

「言えば分かるよ。さっさと行きな」

また脚が飛んできた。今度は左の太ももを蹴られ、よろけた。ぼくは、ほうほうのていで、トイレから出て行こうとした。そのとき、彼女は言った。

「あのさ……あんた、私の名前とか知ってるの？」

そういえば、聞いてなかった。

彼女は、新しい煙草に火をつけ、煙を吐き出しながら言った。

「日野彩女」

ひのあやめ……。

「ふうん、アヤメが来てるんだ」

中休み。日野彩女の伝言を言うのと、恵美は興味なさげに呟き、それから小さく含み笑いをした。

「そんで、アヤメのやつ、あんたに何かした？」

足を蹴られたというと、恵美は手を叩いて喜んだ。

「あいつ……、ふだんは暴力振るわないのに……やっぱ、あんた、ボコりたい気分させるキャラなんだね」

わけがわからず黙っていると、恵美は自分から話した。

「アヤメの奴、結構しつこく誘ってきてさあ、うざいから、タイマン勝負に勝てばいいよって言うて、ボコってやったの」

要するにレズ？ 恵美はぼくを見やって、喉を鳴らして笑った。

「あいつ、ほんとは切れると怖いんだよ。私の彼氏だと知ってたら、金玉潰されてもおかしくなかったよ」

え……。ぼくは青ざめたが、同時に、「彼氏」といつてくれたことが、とても嬉しかった。

昼休み。

体育館に向かう恵美についていこうとすると、「来なくていいよ」と追い払われた。

恵美のいない休み時間は苦痛だった。みな、ぼくをちらちら眺めながら、遠巻きにしている。

その視線の痛さは、快樂にはならない。恵美の強さと、自分の弱さをあらためて感じた。

とうとう我慢しきれなくなって、体育館に急いだ。グラウンドを横切って体育館のドアに手をかけ、ふつと気づいた。

中では、恵美が、アヤメという長身の二年生と、「タイマン勝負」の最中。まさか恵美が負けるとは思えないけれど、この学校にいて、恵美のことはよく知ってるはずなのに、あえて対決を申し込んだほどだ。よほど自信があるに違いない。

そんな二人が戦っている最中に飛び込んで、何をすればいいんだろう。

どうすればいか分らず、ドアにもたれて座り込んでしまったぼくの耳に、ダムダムと、ボールが床に弾む音が聞こえてきた。

あれ……。あれは、バスケットの……。

ドアを開けて中に入ると、恵美とアヤメは、バスケットリングの下で向かい合っていた。アヤメが長い両手をいっぱい伸ばし、向かい合った恵美が、右手でボールを突いてじっとしている。恵美の体が右に動いた。アヤメが、それにつられて動く。と、恵美の体は眼にも留まらぬ速さでアヤメの左側をすり抜け、シュート。ボールがリングを通過した。

「やっりい！」

恵美が拳を突き上げてジャンプした。アヤメが座り込み、頭を抱える。

「あんたさ〜」

アヤメは呻いた。

「一年、ブランクがあるつてのに、なんで、そんなに動けるんだよ〜」

「実力だよん！」

恵美は、アヤメの傍らに座って言った。

「でもさ、アヤメも腕上げたよね。ワン・オン・ワンで私相手に4点も取れたじゃん。以前はやつと2点だったのにさ」

ワン・オン・ワン。バスケットは普通5人对5人だが、一対一で、攻撃と守備を入れ替えつつ、勝負する。最初に5点をとったほうが勝ち……と、後で聞いた。

なんだ……。ぼくは、ほっと息をついた。「タイムマン勝負」つて、バスケかよ……。

「こら〜！」

いきなり恵美の怒鳴り声。顔をあげると、ツカツカとぼくに歩み寄り、胸倉をつかんで、いきなり股間に膝蹴り。

いつもの激痛と嘔吐と湧き上がる性欲。ぼくは右手で股間を押さえて床に這いつくばった。

「あ〜、やっぱり奴隷くんじゃない」

アヤメが笑った。

「あんたからもお願いしてよ、いま見たでしょ。これだけバスケうまいんだから、部活一緒にやつてくれないのにさ」

「余計なこと、言うな！」

恵美は顔を真っ赤にして怒鳴った。真顔だった。

「やんねえよ！ 二度とやんねえよ！」

荒々しく足を踏み鳴らして、恵美は出て行った。

「駄目かあ……」

ぼかんと恵美の後姿を見送っていると、アヤメは髪のをかきむしりながら呟いた。

「つたく……あんたが入ってこなけりや、説得できたかもしれないのにさ」

立ち上がったアヤメは、ぼくに歩み寄り、尻に蹴りを入れて出て行った。

ぼくは、しばらく動けないまま、床に突っ伏していた。

その日。恵美は放課後まで、ぼくに口をきこうとしなかった。ふくれつつらをしたまま、ぼくを見ようとしなかった。

五時間目の授業が終わり、恵美は立ち上がり、ふいと鞆をつかんでドアに歩いた。ついてこようとしたぼくに、いきなり回れ右し、平手打ちを食わせた。呆然と突っ立ったぼくに見向きもせず、恵美は去った。

どうしていいか分からなかった。恵美のいない放課後。いつものように理科の実験室や、屋上や、校舎の裏で恵美に浴びせられる責め苦だけを頼りに、いきたくもない学校に行ったのに……。生徒たちが、ぼくを見ている。視線が痛い。しかし、なんとなく、いつもより取り巻いている田周が短い。ニヤニヤしてぼくを見ている奴もいる。

鳥肌が立った。恵美に嫌われたら、ぼくは無防備だ。不良どもの餌食になるに違いない。ぼくは、こわばった表情で、教室を出た。

いつ、誰に襲われるか分からない。だらしなく制服のネクタイを緩め、大またで闊歩する不良どもが、すごく気になる。もともと、不良とクズの溜まり場なのだ。ぼくは、狼の群れに放り出された子羊も同然だった。狼に襲われないよう守ってくれた恵美からも嫌われた。

泣きたくなくて歩いていると、ふと、ダムダムと、バスケットボールをドリブルする音が聞こえてきた。顔をあげると、ぼくは体育館のそばにいた。

ひよっとしたら……。

ぼくは救いを求めて、体育館のドアを開けた。

体育館では、体操着の女子生徒が5人ばかり、ドリブルシュートの練習をしていた。ボールを手で突きながらリングに向かって走り、シュートする。そのなかに、アヤメがいた。

「お、奴隷くんだ！」

ぼくに気づいたアヤメが叫んだ。女子生徒たちは練習をやめ、いっせいにぼくを見た。

「あー、恵美の？」

「知ってる！ 今日、三年生の校舎でボコられそうになった子でしょ？」

「わあ、弱そう、私もボコれそう」

口々にはしゃぐ女子たちに、ぼくは真っ赤になった。名うての不良校らしく、髪の毛が黒いのはアヤメだけ、他はガラの悪そうな女の子ばかりだ。

「どうしたの？」

歩み寄ってきたアヤメに、ぼくはしばらく口ごもっていたが、何度もしつこく聞かれ、今日、昼休みの体育館以後、恵美にシカトされつづけていることを告白した。

「……そっか」

アヤメは、他の女子部員に練習するよう命令し、ぼくの耳元でささやいた。

「あんた、何も知らないんだね」

え？ と彼女を見たぼくに、アヤメは言った。

「練習終わるまで待ってな。教えてやるよ」

あいつの過去をさ。

練習が終わり、制服に着替えたアヤメが出てくるまで、ぼくは体育館の前で待ち続けた。

「お待たせ」

アヤメが出てきたときは、すでに真っ暗だった。

「んじや、奴隷くんとちよい、デートしてくるわ」

スポーツバッグを肩にかけた部員たちにそう言い、口々に冷やかされながらアヤメは、ぼくを連れて学校の近くの蕎麦屋に入った。

「おごるよ、なんでも注文して」

ぼくはおずおずとキツネうどんを頼み、アヤメは豪快に親子丼大盛りとぎるソバ二枚。外食に慣れていないぼくが、決まり悪げに店のなかを見回しているのを面白そうに見詰めながらアヤメは言った。

「両親共稼ぎで遅いんだ。家でレトルト飯、レンジでチンして喰う気にもならないしき、よくここ来るんだ」

「なんだか、すごく大人に思えた。はあ、とうなずくと、アヤメはけらけら笑って言った。

「実はさ、あんたに頼みがあるんだよ」

「頼み……？」

「あいつに、バスケット部に入ってほしいんだよ」

そしてアヤメは、運ばれてきた親子丼とぎるソバを交互に口に運びながら、「恵美の過去」を

語った。

恵美とは、ミニバスケットの時から一緒でさ。あ、ミニバスケットって、小学生のバスケね。

一個下だったけど、あいつ四年生のときからレギュラーで、結構、このあたりじゃ知られた選手だったんだ。私が卒業した後、あいつキャプテンとして、県大会で四位になって、県選抜で全国大会にも出場したんだよ。

中学の時も同じ学校で、あいつは入部と同時にレギュラーになった。すごかったよ。私が二年、あいつが一年のとき、県大会で決勝まで進んだ。決勝の相手は強豪校だけどね、荒っぽいプレーで有名なところだった。

あいつ、ポイントガードで、いきなり前半にも点とったんだよ。ポイントガードってわかる？自分でボール運んで、シュートも決められる選手。あいつを止められる選手は、この県にはいなかったね。前半を終わって、こちらが15点リード。あいつが入るまでは弱小だったうちらが全国まで見えてきた。大騒ぎだったよ。

そうしたら、相手は汚い手を使ってきやがった。後半が始まってすぐ、相手が恵美のわき腹にひじ打ちした。恵美のやつ、肋骨折ってそのまま退場さ。恵美の骨折った奴も退場になったけど、むこうは強豪、選手層が違う。恵美がいなくなったらうちらは、あつという間に逆転され、負けちゃった。

その頃からかな、恵美が変わったのは。家でなんかあったらしいんだけど、あいつ、すごく凶暴になった。男子相手に喧嘩をふっかけるようになった。何人も怪我させた。金蹴りを覚えたのもその頃じゃないかな。

次の年、私は三年で最後の大会。復帰した恵美の活躍で、準決勝まで進んだ。相手は、例の強豪校。試合前から、向こうのベンチじゃ、恵美をちらちら見ながら相談してた。

また、恵美に怪我させる気かな……。私、恵美にアドバイスしたの。「気をつけなよ」って。すると恵美はにやつと笑って言ったよ。

「怪我するのはあつちだよ」

って。私はキャプテンだったから、「あんたに退場されると困るんだよ。ラフプレイは喧嘩だけにしときなよ」って言ったけど、あいつ、何も言わなかった。

試合が始まると、相手は恵美に二人マークをつけた。ガタイのいい選手が二人、恵美がボールを持つと突進してくるんだ。相手の監督は、しきりに「潰せ！潰せ！」って怒鳴ってる。それでも恵美は、二人を軽くかわして、次々とシュートを決めた。

前半が終わってうちらがリード。すると相手は、一人メンバーを変えてきた。180センチ近くあるようなデブ。技術はないけど、パワーはありそうな、柔道の重量級みたいな顔したブタ女だった。そいつが恵美をマークし、いきなり顔面に肘を入れた。恵美はあおむけに倒れた。鼻血が出た。

ベンチで治療してコートに戻った恵美は、そいつに向かってなんか言った。聞こえなかったけど、顔が冷たく笑ってた。試合が始まると、そいつはファウル覚悟でラフプレーを仕掛けた。たちまち5ファウルで退場。それでも、恵美の得点は抑えられ、こちらは追いつかれた。相手の監督は、してやったりという笑顔だ。

180センチのブタ女は、審判に退場といわれてベンチに戻っていった。すると恵美の奴、いきなり後ろから駆け寄って、そいつの股間に蹴りを入れたんだ。

相手はコートに突っ伏した。両手で股間を押さえてさ、痛そうな顔でしゃがみこんだ。

「おい、審判ー！」

相手の監督が立ち上がって怒鳴った。

「ディスクオリファイング・ファウル（悪質行為）だ！ そいつを退場させろ！」

声は怒っていたけど、顔はなんとなく笑ってた。恵美を挑発し、乱暴行為をさせて退場に追い込む作戦なのはミエミエだった。

恵美の奴……。私は真っ青になった。試合中に相手選手に蹴りを入れるなんて、向こうの思う壺じゃないか……。

すると恵美は、しゃがみこむブタ女の髪の毛をつかみ、泣き叫ぶそいつの顔を上げさせ、相手の監督に向かって叫んだ。

「あめえ、こいつに私の骨を折れて命令したんだろ！ 去年みたいにさ！」

会場が凍りついた。恵美はブタ女の耳元で叫んだ。

「な、そうだろ、正直に言えよ！」

「君、やめなさい！」

審判が、恵美の肩を掴んで引き離れた。恵美は審判の手を振り払うと、いきなり相手ベンチまで走って行って、監督の股間を蹴り上げたんだ。

相手の監督、キャ！　って女みたいな悲鳴をあげて、床に突っ伏した。恵美は、そいつをさんざん蹴り飛ばした。

「勝つためには、何してもいいのかよ！　このクズ！」

審判と大会役員と両方の選手がみんな駆け寄って、恵美を押さえつけた。それでも恵美は怒鳴り続けた。

「こんな卑怯なチームが優勝するようなバスケなんて、嫌いだ！　許せねえ！　てめえらのキンタマ、潰してやる！」

試合は中止。恵美は卒業するまで公式戦出場停止処分。相手の監督は半月、入院した。

それで恵美はバスケをやめたんだ……。

「あいつくらいバスケが上手い選手は、県内にもいなかったよ」

アヤメはさびしそうな顔で言った。

「なんでも、小さいとき父親に習ったんだってさ。何年か前にいなくなったらしいんだけど……

あいつとまたバスケしたいんだよ」

心なしか、アヤメの眼が潤んでいた。

「私が何度言っても、駄目なんだよ。頼むよ、あいつに言ってくれよ」

アヤメはぼくの手を握り締め、頭を下げた。

「ばあか！」

いきなり膝が股間に飛んできた。

翌日、アヤメの言葉を伝えるなり、恵美は顔を真っ赤にして怒った。両手で股間を押さえてうずくまろうとしたぼくの胸倉をつかんで起こし、さらに右手で睾丸を握り締めた。

悲鳴をあげるぼくに、恵美は怒鳴った。

「勃起させてんじやねえよ。潰すぞ！」

いつもの恵美ではなかった。彼女の手のひらのなかで、睾丸が変形するくらい、強く握られた。本当に潰されるんじや……。

恐怖は、かえってぼくのペニスを固く膨張させた。

平手打ちを浴びせ、恵美は回れ右をして去っていった。

「あんたでも駄目か……」

放課後、体育館の前でアヤメに会うと、彼女は悲しそうに微笑んでいった。

「まあ、奴隷くんの言うこときくわけないか」

侮辱的な言葉を呟いた後、アヤメはぼくの肩をぼんと叩いて言った。

「悪かったね。練習終わるまで待っていて。今日もおごつてやるからさ」

例の蕎麦屋でアヤメは天ぷらそばを二杯たいらげ、ぼくはざる蕎麦を一枚すすった。

食べ終わった後、アヤメは満足そうに息を吐き出し、訊ねた。

「奴隷くん、バスケやったことある？」

体育の授業でやったくらいだが、クラスでも下手なほうから数えて四番目くらいだった。

「やろうぜ」

引つ張られていったのは、近くにある広い公園だった。その片隅に、バスケット用のリングがあった。

アヤメは、バッグからボールを取り出し、幾度かドリブルした後、リングに向かってしゅつとボールを放った。ボールはきれいにリングを通過した。

「やってみ」

アヤメに言われてぼくもボールをリングに向けて放ったが、バックボードにぶつかり、むなし

く弾き返された。

「それじゃ駄目だよ」

アヤメは笑いながら指導してくれた。足は肩幅に広げて、右手を上にあげてボールを持ち、肘は直角に曲げて、左手は添えるだけ、膝を曲げて、すつと背筋を伸ばしながらシュートするの。

何度も叱られながら繰り返し返したが、ボールはいつこうにリングを通過しない。

「おい！」

背中から声がした。二十半ばだろうか。180センチ以上はある大男の二人組みが立っていた。

やけにガタイはいいが、一人は金髪で腕に入れ墨、一人はスキンヘッド。アメリカのプロバスケットチームのユニフォームのレプリカを着ている。

「どけよ、へたくそ」

脅されてぼくはひるんだが、アヤメは言い返した。

「ちよつと待っててよ」

「待てねえよ」

金髪がニヤニヤしながら近づき、いきなりぼくの太ももにローキックを食わせた。金属バットで殴られたような衝撃だった。ぼくは悲鳴をあげ、蹴られた右足を抱えてうずくまった。

「なにするのよ！」

アヤメは金髪に近寄り、肩を突いた。金髪は微動だにせず、アヤメのお腹を殴った。スキンヘ

ツドがげたげた笑った。アヤメは顔をゆがめながら、拳を握り締めた。金髪の鼻面にパンチを浴びせるふりをして、右膝を跳ね上げた。膝は、金髪の股間を直撃する……。

と思われた瞬間、アヤメの顔が、はっとしたように強張った。膝は、金髪の睾丸まであと二センチのところまで止まった。

金髪が、アヤメの右頬を殴った。アヤメはふらふらと後ずさりし、しゃがみこんだ。

「ほら、後片付けはしてやるぜ！」

スキンヘッドがアヤメのバッグを拾い上げ、ファスナーを開いて放り投げた。タオルやシューズ、シャツなどが散乱した。

アヤメはうずくまったまま、眼をつぶっていた。ぼくはおずおずと散乱したアヤメのバスケットをバッグに戻し、彼女に歩み寄った。

アヤメの堅く合わさった上下の脛の隙間から、涙が流れていた。その背後で、二人組は笑いながら一対一の勝負に興じていた。

翌朝。

教室に入って椅子に座り、教科書とノートを机に出していると、恵美がふてくされたように入ってきて、隣の席に座った。ぼくに目もくれない。

まだ怒ってる……。ぼくは身を硬くしているしかなかった。

昨夜、アヤメが二人組に乱暴者にひどい目に合わされたことを恵美に言うべきかどうか迷った。恵美から受ける暴力は、眠っていたぼくの性癖を呼び覚まし、新たな楽しみを味わうことができた。しかし、同じ股間を蹴られるのも、笑いながら楽しそうな恵美に蹴られるのと、怒った恵美から蹴られるのでは、意味が違う。

また地雷を踏んで、憎しみのこもった蹴りを入れられるのは嫌だった。

しかし……。

あの気丈だけど、優しく、友達思いのアヤメが、ひどい目にあっただ。ぼくにはどうすることもできない。しかし、二度もご馳走になったのだ。なんとかしてあげたい。あるいは恵美だったら、アヤメの気を晴らしてあげられるんじゃないか。

ぼくは恵美の奴隷にすぎないが、アヤメは恵美の親友なのだから。

昼休み、思い切って恵美に、昨夜の件を話した。

恵美は、呆然とした表情だったが、やがて顔を強張らせて言った。

「それが私となんの関係があるんだよ」

冷やかな物言いが恐ろしかった。まだ、いきなり股間を不意打ちされるほうがましだ。

「あの……」

ぼくはしどろもどろに言った。

アヤメがぼくをバスケットに誘ったのは、たぶん、彼女がマジで、恵美にバスケットに戻ってほし

いからじゃないだろうか。恵美の奴隷であるぼくにバスケの面白さを伝えることで、少しでもバスケに心が傾くかもしれない。藁にもすがる思いだったんじゃないだろうか。

恵美は、顔をそむけて聞いていたが、やがて俯き、ため息をついた。

「余計なことしやがって……」

それから、空を見上げて言った。

「私にとつちや、バスケなんて過去なんだよ……」

その横顔に浮かぶ寂しげな表情に、胸を疲れていると、いきなり平手打ちが飛んできた。

脳を直接ゆすぶるような衝撃に呆然としてみると、恵美は言った。

「放課後、つきあえ」

その顔は笑っていた。

最後の授業が終わると、恵美はふいどこかに消えた。教室で待っていると、再び入ってきた

恵美は、白いTシャツに、オレンジ色のハーフパンツ姿だった。

「行くよ」

なぜ着替えたのか、聞く暇もなく命令された。

日が暮れて真っ暗になるまで、ぼくは恵美と、体育館の前で待った。やがて練習を終えた部員たちが出てきた。

アヤメは、並んでたっている恵美とぼくを見て、驚いた顔だった。

「アヤメ」

恵美は笑って、アヤメに歩み寄った。

「飯食いにいこうぜ」

今度は蕎麦屋ではなく、焼肉屋に入った。恵美とアヤメは、カルビとロースを六皿たいらげた。恵美は一人で喋った。ほとんどが世間話で、昨夜のことも聞かず、バスケのバの字も出なかった。食べ終わると、恵美は自分で代金を払い、大股に店を出た。ついていくと、彼女はどんどん歩き、やがて昨夜の公園に入った。

バスケットのリングの下には、誰もいなかった。恵美は、街灯に照らされたリングを見上げ、アヤメに言った。

「ボール、貸してよ」

瞬きもせずリングを見詰める恵美の眼は、澄み切っていた。

アヤメは強張った表情で、バッグからボールを取り出し、恵美にパスした。恵美は胸元に放たれたボールを正確にキャッチし、くるりとターンしてシュートした。ボールはきれいに、リングを通過し、地面にバウンドして、再び恵美の胸元に帰ってきた。

「あのさ」

次々とシュートを放つ恵美を一瞥し、アヤメはぼくに言った。

「昨夜のこと、恵美に話したの？」

敵しい目つきに、ぼくが躊躇っていると、恵美がボールを構えながら言った。

「聞いてねえよ」

すつと放たれたボールが、バスケットに詳しくないぼくにも惚れ惚れするほどきれいな曲線を描いてリングに収まった。

「うそ！」

アヤメは怒ったように言った。

「私のために、あいつらにリベンジするってんなら、いい迷惑だよ。大会も近いし、騒ぎに巻き込まれるわけにはいかないんだよ！」

「聞いてねえって言ってるじゃん」

恵美はボールをドリブルし、フィギュアスケートの選手がターンするように、くるりと鮮やかにリングの下で一回転し、右手を伸ばしてジャンプし、高く跳躍してレイアップシュートを決めた。

「私、部活やる気はないよ」

着地し、ボールを拾った恵美は、笑って言った。

「でも、アヤメとはバスケットしたい」

アヤメは、はっとした表情で、恵美を見詰めた。
そのとき。

「昨日のへたくそじゃねえかよ」

振り向くと、例の金髪とスキンヘッドだった。
ぼくはぞっとした。

アヤメが心配したように、恵美は、あの廃工場でやったように、こいつらを去勢するんじゃないだろうか……。

「こら、どけよ。また泣きてえのかよ」

アヤメが唇を噛み締め、二人に歩み寄ろうとしたのを、恵美は肩をつかんで止めた。

「いいよ、どいてやるよ」

アヤメが驚いたように恵美を見た。恵美は続けた。

「ただし、うちに勝ったらね」

「ああん？」

金髪が小ばかにしたような顔で言った。

「勝つって、なんだよ」

「決まってるじゃん、バスケットで勝負しようぜ」

金髪とスキンヘッドは顔を見合わせてぎゃはははと笑った。

「ばっかじゃねえの」

「女が勝てるかよ」

「おめえみたいなチビが何するってんだよ」

「そっかあ」

恵美は挑発した。

「自信ないんだ」

リングに向き直り、ジャンプしてシュート。意外なことに、ボールはバックボードのはるか上を抜けていった。

スキンヘッドと金髪はまた笑い転げた。

「恵美！」

アヤメが叫んだ。

「帰るよ！」

「そうはいかねえよ」

金髪がアヤメに歩み寄り、肩をつかんだ。アヤメはぞくんと棒立ちになった。金髪は、アヤメの肩をつかんだまま、恵美に言った。

「勝負してやるよ、そのかわり……」

金髪は、醜く唇をゆがめて言った。

「もしおめえら負けたら、やらせろよ」

「何を？」

とぼけた顔で聞き返す恵美に、金髪は言った。

「エッチだよ」

「いいよ」

平然と、恵美は答えた。

恵美とアヤメ、金髪とスキンヘッドの2対2の勝負が始まった。

先に5点とったほうが勝ち。最初は男の側の攻撃から。スキンヘッドが金髪にパス。金髪はドリブルでゴールに向かう。アヤメが立ちふさがる。腰を落として、金髪と向き合う。金髪はふつとフェイントをいれ、スキンヘッドにパスした。

スキンヘッドはボールを持ち、シュート体勢に入る。恵美が両手をあげ、その前に立ちふさがる。スキンヘッドは10g以上、10gセンチ台の小柄な恵美と向き合うと、大人と子供だった。

スキンヘッドはシュートするふりしてドリブルし、恵美の左脇をすり抜け、ボールを持ってシュート。

と、すばやく後退して再びスキンヘッドの前に立った恵美が、ジャンプした。驚くべき高さに

舞い上がった。ボールがスキンヘッドの手から放たれると同時に、恵美の右手が叩き落した。

地面にバウンドしたボールを拾ったのは、またも恵美だった。呆然とするスキンヘッドの目の前をドリブルですり抜け、リングのはるか後方まで行き、シュート。ボールは長い放物線を描いて、リングを通過した。

「やったー!!!」

飛び上がったのはアヤメだった。

「ナイスシュート!」

駆け寄り、恵美とハイタッチ。呆然と立っている男たちを尻目に、今度は女子側の攻撃。アヤメが恵美にパス。ドリブルする恵美に、スキンヘッドが立ちふさがる。恵美はすばやく、スキンヘッドの足元にボールをたたきつけた。ボールはスキンヘッドの股間を通り抜け、アヤメの手に渡った。金髪がアヤメに立ちふさがると、恵美は、アヤメと金髪の間に割って入った。

「アヤメ、フェイダウェイ!」

恵美の声に、アヤメは体を後ろにそらすようにしてシュート。スキンヘッドがアヤメの前に立ちふさがるコンマ何秒か前。絶妙のタイミングだった。

女子、2点目。

二人の男は怒り心頭に達していた。金髪がスキンヘッドにパス。と、その間にすばやく入った

恵美がパスをカットし、そのままシュート。女子3点目。

女子の攻撃。アヤメからパスを受けた恵美は、ドリブルしながらスキンヘッドの前で一回転してすり抜け、わざと金髪に寄って行き、さらにターンして駆け寄ったアヤメにパス。アヤメがレイアップシュートを決めて、4点目。

顔をくしゃくしゃにしてはしゃぐ二人の女の子を、おつかない顔で見ながら、金髪とスキンヘッドはなにやら囁きあった。

男子の攻撃、パスを受けた金髪が、ドリブルしながらゆっくりとアヤメに向かっていった。低い姿勢で待ち受けるアヤメの前でボールを突きながら、金髪は目を動かして、スキンヘッドを探した。その背後に忍び寄った恵美が、背後から手を伸ばし、ボールを奪った。

「いくよ!」

恵美がドリブルを開始し、アヤメはスキンヘッドのマークをはずして走った。恵美がゴール下でシュート体勢に入る。

そのとき、背後から忍び寄った金髪が、いきなり恵美を背中を突いた。

恵美はバランスを崩し、ボールを取り落とした。スキンヘッドが拾い上げ、シュート。

「卑怯じゃん!」

アヤメが怒鳴った。

「フアウルだよ！ フリースローだよ！」

「おい」

スキンヘッドが金髪に言った。

「おまえ、なんかやった？」

「なんにも」

金髪が首を振り、怒鳴った。

「言いがかりつけんじゃねえよ、こら！」

アヤメを突き飛ばした。アヤメはしりもちをついた。真っ赤になって立ち上がり、金髪に向かっていこうとしたとき。

「アヤメ！」

恵美が叫んだ。アヤメが振り向くと、恵美はボールを人差し指の上に乗せて回しながら、笑っていた。

「あんた、退場」

え……。呆然とするアヤメに、恵美は言った。

「テクニカル・フアウルだよ。判定に文句言ったら、退場だろ」

「恵美、あんたさあ！」

アヤメは拳を握り締めて怒鳴った。

「なんで自分ひとりでも決めようとするんだよ！」

その眼に涙が浮かんでいた。

「あたしの気持ちなんて、どうでもいいんだろ！」

恵美の顔が一瞬強張った。だが、すぐに笑顔に戻り、金髪とスキンヘッドに向かって言った。

「さ、続き。あいつ退場だから、私一人で相手するよ」

憤然とアヤメはぼくの隣に座った。

試合は一方的だった。恵美は、打って変わって緩慢なプレーだった。二人の男はあつという間に追いついた。

「あいつ……」

ふと見ると、アヤメがまた涙目になっていた。

「……そういうことかよ」

男子が5点目を決め、ひとしきり勝利のハイタッチを交わした後、にたにたしながら恵美に向かった。

「おい」

金髪が言った。

「約束、忘れてねえだろうな」

「なんだっけ？」

とぼける恵美に、金髪は吼えた。

「勝負に負けたらやらせるって言っただろ！」

「あ、そか」

恵美は肩をすくめた。

「じゃあないね。でも……」

恵美はアヤメを指差した。

「彼女は退場だったんだから、やらせなくっていいでしょ？」

アヤメを見ると、俯いている。不機嫌な顔で呟いていた。

……心配りがややこしいんだよ、おめーは。

金髪とスキンヘッドは顔を見合わせていたが、やがて金髪が言った。

「いいぜ」

「サンドイッチっすね！」

スキンヘッドが笑った。

「やってみたかったんだ、おれ！」

恵美に追い払われるように公園を出たアヤメを、とりあえずぼくは追いかけた。

アヤメは、バッグを肩にかついで笑っていた。

「奴隷くんさ」

不意にアヤメは立ち止まり、ぼくを見た。

「恵美ってほんと、馬鹿だろ？」

なんと返事していいやら分からず黙っていると、アヤメは言った。

「昔からそうなんだよ……」

それから、ふいと背を向けて歩き出した。来るな、といわれているようで、ぼくは立ち止まり、少し逡巡し、公園に戻った。

最初はゆっくりと、次第に足早になり、公園に着いたときには、駆け足で息が切れた。

しばらく、両手で膝をつかんで肩で息をし、やっとひとこちがつき、ゆっくりと歩き出した。

恵美が心配なのではない。廃工場で、あつという間に三人を去勢した恵美だ。いざとなれば、

あんな二人組、簡単にやつつけるだろう。

ぼくは怖かったのだ。何しに戻ってきたんだよ！ 怖い顔でそう怒鳴られるのが。そして、余計なことしやがって……。明日から、また口をきいてくれなくなるんじゃないか、と。

それでも、ぼくはリングのある場所を目指して歩いた。恵美に、会いたかったから。会って、

もうぼくを見捨てないでいてくれるということを確認したから。いろいろ会ったここ何日かを、ぼくへの攻撃で締めくくってほしかったから。

そして……、いや、それだけじゃない……。

もつと恵美のことを知りたくなつたから。

はさ。

静かにボールがリングを通過し、コンクリートを敷いた地面に落ちて、ダム！ と硬いゴムの音を響かせた。

目に入ったのは恵美の背中だった。

膝を曲げてボールを構え、すつと背筋を伸ばす。長い両腕が美しく揃って夜空に突き出され、ボールが鮮やかな放物線を描いて舞い上がる。

そこにいたのは、恵美だけだった。

ボールはまたもリングを通過し、地面に落下し、バウンドして恵美の手元に戻ってきた。

しばらく、恵美は、距離や位置を変えながら、シュートを繰り返した。白いTシャツは汗にまみれ、しなやかな背中をくつきりと映し出していた、シュートする度に、オレンジ色のハーフパンツから伸びた脚が、まっすぐに伸び、軽やかに地面から離れて宙に浮く。

ぼくの存在に気づいているのか……。無心にシュートを繰り返す姿に、ぼくはしば

し、見とれていた。

ボールが、リングに跳ね返された。ミスショットだった。

背を丸めて転がったボールを拾い上げ、しばらく、その姿勢で、恵美はじつと俯いていた。額からしたたった汗が、地面をぬらした。

やがて背を伸ばした恵美は、ボールを脇に抱え、振り返ってぼくを見た。ぼくを見て、なんだか嬉しそうだった。嬉しそうに笑っていた。

「やっぱ、戻ってきたね」

そう言い、いきなりボールを横に放った。ボールは一直線に、数メートル離れた公衆トイレの陰に飛んだ。その暗がりから、うめき声が漏れた。よく見ると、トイレの陰に、さっきの二人組みが転がっていた。

恵美は、ボールの行方を見もせず、ぼくに歩み寄り、いきなり右膝で、ぼくの股間を蹴り上げた。

倒れそうになるぼくの腕をつかんで強引に立たせ、耳元でささやいた。

「お茶につきあう？ それとも、あいつらと一緒に寝てる？」

ぼくは、全身全霊、急所の痛みで奪われた気力を振り絞って、恵美と一緒に公園を出た。

潰さなかったよ。

夜道を歩きながら、恵美はそう言った。

アヤメが、もうすぐ大会じゃなきゃ、ふたつとも潰してた。

ま、どっちにしても、怪我をするのはあいつら。それだけは何時もと同じだけだね。

あつけなかったよ。一発ずつ、けりを入れてやったら、ひいひい泣いて、謝った。名前と住所は押さえたから、あれで懲りなかったら、今度こそ、潰してやるつもりだよ。

明日、アヤメに聞かれたら、言つてよ。私、もう部活は絶対にやんない。でも……。

でも？

聞き返したとたん、恵美はぼくの腰を叩いた。腰骨の衝撃が睾丸に伝わり、ぼくは両手で股間を押さえてしゃがみこんだ。

恵美は、ぼくを見もせず、すたすたと歩きながら言った。

アヤメとは、ずっとバスケしたい。

ちよつと振り返り、両手を腰に回し、小首をかしげ、顔じゅうで笑いながら、恵美は言った。

だって、大好きだから。(2006年1月23日)